

ISBN978-4-903426-81-5

C1020 ¥3600E



9784903426815



1921020036000

定価 (本体 3,600円 + 税)

一九三〇年代以降、満洲事変から満洲国建国、日中戦争、アジア太平洋戦争へと東アジアは激動の時代を迎える。そのなかで東アジアの知識人たちは、それぞれに戦争への向き合い方を模索していき、ファシズム思想や社会主義思想、東亜協同体論など様々な思想が交錯する。そして、転向して戦争協力へと進む者、戦争や植民地支配に反対し抵抗の道を選ぶ者、あるいは日本への戦争協力を民族のためだと自己欺瞞していく者など、知識人たちは複雑な軌跡を描いていく。様々な「知」の交錯と対立・融合を描き出す戦時下の思想史。

講座

東アジアの知識人

4 戦争と向き合って

講座

趙景達・原田敬一
村田雄二郎・安田常雄 編

東アジアの知識人

4 戦争と向き合って

満洲事変〜日本敗戦

講座

東アジアの知識人 全5巻

① 文明と伝統社会

— 19世紀中葉〜日清戦争 —

責任編者 村田雄二郎

② 近代国家の形成

— 日清戦争〜韓国併合・辛亥革命 —

責任編者 原田敬一

③ 「社会」の発見と変容

— 韓国併合〜満洲事変 —

責任編者 趙景達

④ 戦争と向き合って

— 満洲事変〜日本敗戦 —

責任編者 安田常雄

⑤ さまざまな戦後

— 日本敗戦〜1950年代 —

責任編者 趙景達・原田敬一

村田雄二郎・安田常雄

趙景達

原田敬一

村田雄二郎

安田常雄

有志舎

有志舎

アジア発、「知」の創出に向けて!

この視点から、近現代100年にわたる
未来を再考する。

刊行にあたって

総論 戦争と向き合って

安田常雄

1

I 昭和維新と農本主義

橋孝三郎——日本の〈救済〉を追究しつづけた農本主義者

北 一輝——「中国」そして「亜細亜」

朝鮮農民社の知識人たち——その多面性

晏陽初と陶行知——平民教育から農村改良へ

岩崎正弥

萩原 稔

松本武祝

山本 真

66 49 30 14

II 社会主義の思想

陳 独 秀——永遠なる反対派

白 南 雲——普遍としての〈民族主義〉

戸 坂 潤——ジャーナリズム論の先駆者

人民戦線の人々——中井正一と仲間たち

ホー・チ・ミン——民族と階級の相克の中で

緒形 康

洪 宗 郁

根津朝彦

後藤嘉宏

古田元夫

163 141 122 102 84

III 転向・協力・抵抗

市川房枝——「帝国のフェミニズム」の陥穽

崔 麟——ある「モダンボーイ」の肖像

汪 精 衛——対日協力を選んだ「革命家」

林 猷 堂——台湾人良心の体現者

加納実紀代

川瀬貴也

劉 傑

許雪 姫

(訳 若林正文)

232 214 198 180

IV 満洲建国と東亜協同体論

三木清と尾崎秀実——孤立する知識人と「東亜協同体論」

石原莞爾——ドイツ軍事史研究から最終戦争論へ

橋 樸——日中そしてアジアと世界のありうべき途を求めて

東亜聯盟運動に参加した朝鮮人——曹敏柱と姜永錫

朴錫胤——植民地期最高の朝鮮人エリート

太田亮吾

テイノ・シエルツ

山室信一

松田利彦

水野直樹

326 310 292 269 252

V 非転向と粛清

明石順三——知識人の信仰と責任

金 天 海——在日朝鮮人大衆と共に生きた社会運動家

国崎定洞——亡命知識人の悲劇

趙景達

樋口雄一

加藤哲郎

380 362 344

国崎定洞——亡命知識人の悲劇

加藤哲郎

1 社会衛生学から国際革命家、そして肅清犠牲者に

国崎定洞（くにさき せいどう）（一八九四～一九三七年）という、二〇世紀日本が生んだユニークな知識人について、今日知っている人は多くはないだろう。筆者は、その生涯を医学者（故）川上武と共に追いかけて、これまで何冊かの書物で論じてきた（川上武・加藤哲郎・松井坦編『社会衛生学から革命へ』勁草書房、一九七七年、加藤哲郎「モスクワで肅清された日本人」青木書店、一九九四年、川上武・加藤哲郎「人間 国崎定洞」勁草書房、一九九五年、加藤哲郎「国境を越えるユートピア」平凡社ライブラリー、二〇〇一年）。また、インターネット上の個人ホームページ「ネチズンカレッジ」に英文・独文を含む資料をかかげて、世界中の読者から情報を求めてきた。それは、国崎定洞の生涯の活動の場が、日本にとどまらず、ドイツ、ロシア（旧ソ連）などいくつかの国にまたがっていたからである（<http://www.fiji4nor.jp/~katote/cv.html#history>）。

国崎定洞は、一八九四年（明治二七）生まれの医学者で、日本の社会衛生学の開拓者である。東京帝大医学部助教として留学中の一九二八年（昭和三）にドイツ共産党に入党し、ドイツ共産党日本人部責任者として、千田是也、勝本清一郎、小林陽之助、野村平爾らに独日本人の反戦反ナチ活動を指導した国際的革命家でもある。ベルリン日本人反帝グループの代表としてアムステルダム国際反戦大会に出席した直後、一九三二年九月四日に片山潜の招きでモスクワに亡命、一九三七年八月四日に逮捕され、十二月一〇日に銃殺された。ソ連での生活は五年ほど、いわゆるスターリン肅清による日本人犠牲者の一人である。

実は、こんな経歴が明らかになったのは生誕一〇〇年後、一九九四年のことである。東大医学部時代については小宮義孝・曾田長宗（そだ ながむね）ら医師・医学者たちの、ベルリン留学時代については有澤広巳・千田是也・鈴木東民（すずき とうみん）・山田勝次郎・平野義太郎・堀江邑一（ほりえ くにひと）ら共に青春をすごした友人たちの証言・回想で、ある程度は知られていたが、モスクワでの国崎定洞については謎に一つまれ、タブーにされてきた。一九三〇年代後半にソ連で行方不明になったのだから「偉大な同志スターリン」によって暴かれた「帝国主義の手先・スパイ」であったろうという憶測が、戦後の日本共産党周辺でささやかれ、党幹部から公然と語られていた（神山茂夫「武装メーデー事件」『文藝春秋臨時増刊・昭和の

三五大事件』一九五五年八月）。

国崎定洞が戦後に再発掘されたのは、医学史家川上武・上林茂暢「国崎定洞——抵抗の医学者」（勁草書房、一九七〇年）によってである。川上らは日本医学史を資本主義発達史のなかで位置づける作業のなかで、小宮・曾田・有澤・千田らからの綿密な聞き取りによって、社会衛生学の先駆者としての国崎定洞の生涯に光をあて、国崎の名を歴史に蘇生させた。

国崎定洞のソ連での肅清・客死が明らかになったのは、一九七四年のことであ



国崎定洞

る。ベルリン時代の友人鈴木東民夫妻が、西ベルリンの電話帳を手あたり次第にあたつて、フリーダ夫人・遺児タツコの存命を奇跡的に確認した。フリーダ夫人は一九六〇年頃に、東ベルリンのソ連大使館から夫国崎定洞のソ連での死亡を口頭で通知されていた。鈴木・千田・有澤・石堂清倫ら友人たちが「国崎定洞をしのぶ会」を開き、マスコミもとりあげた。

それを後追いで、日本共産党もソ連共産党に問いあわせ、国崎定洞の一九三七年八月四日の逮捕、一二月一日「獄死」の命日、一九五九年法的「名誉回復」の事実が明らかになった。一九三三年にソ連亡命後の国崎が、クトベ（東洋勤労者共産主義大学）大学院に学び、外国労働者出版所で働いていたこと、片山潜の死後なぜか国崎は在ソ日本人のなかで孤立したこと、フリーダ夫人は夫の生死も不明のままスターリンのソ連からヒットラーのドイツへと強制送還され娘とともに苦難の生活を強いられたことなどが、フリーダ夫人の証言で判明した。しかし国崎定洞の逮捕・粛清の事情は、依然謎に包まれていた。「しのぶ会」事務局の川上武と筆者（加藤哲郎）は、国崎の伝記を改訂し、遺稿集を編んだ（川上武「流離の革命家」一九七六年、前掲「社会衛生学から革命へ」一九七七年、共に勁草書房）。

ところが一九八九年のベルリンの壁の崩壊、九一年のソ連解体は、全く予想外の国崎定洞粛清の真相をもたらした。日本共産党名誉議長野坂参三の失脚・除名を導いた小林峻一・加藤昭「闇の男」（文藝春秋社、一九九三年）の付録資料のなかに、国崎の名が出てきた。そこには一九五九年一〇月のソ連最高裁判所「国崎定洞の名誉回復決定書」も入っていた。私たちはそれらソ連共産党文書館秘密資料「国崎定洞ファイル」を解読して、粛清の真相をつきとめた。国崎の「獄死」は「銃殺」であった。国崎をソ連秘密警察に「売った」のは、日本共産党指導者山本懸蔵であった。

その詳細は、前掲加藤「モスクワで粛清された日本人」「国境を越えるユートピア」、及び川上・加藤共著の決定版伝記「人間 国崎定洞」に記したが、モスクワでの国崎定洞は、党籍はドイツ共産党のままでも、多くは日本共産党関係の仕事に従事した。国崎をモスクワに招いた当時の片山潜は、日本からやってきた指導者山本懸蔵・野坂参三と

折り合いが悪かった。特に片山と山本はたがいに「スパイ」と疑いあつており、片山死後の一九三四年秋から、後見人を失った国崎は、山本の密告によりソ連秘密警察にひそかに監視されていた。銃殺時の国崎の罪名は、東大助教就任前の兵役中から陸軍謀報部のスパイとあったが、「ファイル」を仔細に検討すると、入国時からモスクワ日本共産党指導部内の疑心暗鬼に巻き込まれ、プチブル知識人出身の片山派として、労働運動出身の山本に恨まれ、秘密警察に売られていた。野坂参三は曖昧な態度をとって、後に山本を告発した。

国崎と同期に粛清された一九三〇年代ソ連在住日本人は、国崎を売った山本懸蔵夫妻や野坂参三夫人龍を含め、約四〇人が確認された。その他四十人余が、逮捕・銃殺・強制収容所送り・国外追放になった可能性が高いが行方不明のままである。そのほとんどは、片山・山本・野坂・国崎の四人の指導者との政治的・人的つながりが、そのまま「スパイ団」とされたものであった。在ソ連日本人コミュニティは、連鎖的に粛清されて壊滅した。この時代を自己保身を重ねて無傷で生き残りをえたのは、戦後の日本共産党指導者野坂参三だけであった。

以上のように、国崎定洞は、晩年のスターリン粛清による客死の真相が明らかになることによって、冷戦終焉・ソ連崩壊後の日本で脚光を浴びた。国崎定洞の四四年の生涯は、時間的にも空間的にも、くつきりと二つに分かれる。日本での誕生から社会医学者としての前半生の活動と、ドイツに留学して反戦平和運動に加わり、それがもとで旧ソ連のモスクワに亡命し、志し半ばで粛清の犠牲となる後半生である。

2 社会問題と医学者——震災、医学、社会

国崎定洞の医学者への道は、決定版伝記である川上武・加藤哲郎「人間 国崎定洞」に詳しい。たんなる医師・医学者ではなく、社会衛生学という社会との接点を持った医学の日本における開拓者であったことが、後半生の平和運

動・革命運動への献身の前提となる。

一九九四年(明治二七)一〇月五日、熊本県熊本市生まれ、父宗英は士族で医者であったが、漢方医だった。西洋医学が入ってきて父の仕事も苦しくなり、物心つく前に一家で対馬に移った。国崎定洞は、一〇歳まで朝鮮半島にも中国大陸にも通じる日本の辺境対馬で、玄界灘を見て育つ。成績がよく、向学心に燃えていたため、一〇歳で親元を離れ、姉の嫁ぎ先である埼玉県川越市の弁護士田中真蔵の家から高等小学校に入学する。

川越で高等小学校・中学校を終え、旧制一高三部(医科志望)から東京帝大医学部へとストレートで進学する。ちょうど大正デモクラシーから、ロシア革命の影響で左翼思想が入ってくる時期である。優等生国崎定洞も、河上肇(註)「貧乏物語」(一九一七年)などは読んでいた。しかし医科生であるから、同時期に生まれた法科生中心の政治団体、東大新人会などには加わらなかった。

医学部卒業と同時に伝染病研究所に入り、コレラやペストの防疫に関わる細菌学を研究する。そこから、公衆衛生や紡績女工の肺結核、炭鉱労働者の労働環境などに研究対象が広がった。ドイツで開拓された学問ではあるが、ドイツ語の社会衛生学のテキストの翻訳にはあきらまず、マルクス『資本論』やエンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』から社会問題とその解決策、社会政策としての医学・医療を考えるようになる。

一九二三年(大正一二)九月の関東大震災時について、国崎定洞自身による記録は残されていないが、震災現場での防疫・伝染病対策と被災者の治療・健康管理に尽力した。医学部後輩の曾田長宗(戦後国立公衆衛生院長)は、「(国崎は)震災のときなんかは吉原にいたというふうにはくらくら聞いているんです。あそこへ火が回ってきたとき、若い女郎やおかみ連中なんかをずいぶん助け出して、その後は神様みたいに慕われている」と回想している(『社会医学のほのかな道』医学書院、一九八五年、一六頁)。国崎の社会と医療の関わりについての思想に影響を受けた後輩の小宮義孝(戦後日本予防衛生研究所長)や曾田長宗ら東大医学部の心ある学生たちは、震災救援の中で、当初の救護団活動から、

恒常的な貧民医療救済、セツルメント医療運動に入っていく。その社会と関わる伝統は、長野佐久総合病院で農村地域医療を拓いた若月俊一(日本農村医学会創立者、国際農村医学会名誉会長)らに受け継がれていく(宮田親平「だれが風をみたでしょう——ボランティアの原点・東大セツルメント物語」文藝春秋、一九九五年)。

国崎定洞は、震災一年後の一九二四年八月に、伝染病研究所技官から東京帝国大学医学部衛生学教室助教授に抜擢される。それは、たんに衛生学講座がおおきくなったということではなく、国崎任用の二カ月前、医学部教授会で「社会衛生学講座開設趣意書」が採択され、日本ではじめて社会衛生学講座が発発することが決まったからである。つまり国崎定洞は、日本における「社会衛生学」創設の任務を、国家と東京大学から与えられた。

近年社会政策の必要を感じ、之が研究実施益々盛となれり。是等の問題に關し、医学の關係する所頗る多し、為に社会衛生学の勃興を促し、労働、職業、都市、住居、飲酒、食料、花柳病、結核、乳児、出産、罹病、死亡保険、その他の問題に關する社会衛生学研究、ますます隆盛をきわむるに至れる。欧米諸国の大学に於ては此趨勢に鑑み、已に社会衛生学講座を設け、正教授をして之が講義研究に従事せしむる処少からず、我大学にありては従来衛生学講義の緒論に於て、僅かに其の一端を講述するに止まり、他に述ぶる所なし(『日本医事新報』第一二六号、一九二四年七月二五日)。

今日では、東日本大震災や東京電力福島原発事故によって、あるいは医療保険や介護保険の制度化によって、医学・医療と社会の関わりは、自明のものとされている。水俣病のような公害や、スモンのような薬害に対して、医学者は科学的知見によって社会に貢献できる。国崎定洞は、若き日に関東大震災を体験することによって、社会衛生学に本格的に取り組み、一九二六年(昭和一)、文部省から二年間の在外研修を命じられる。国崎は社会衛生学研究を目的にドイツに派遣された。当時の医学界では、ドイツは世界の最先端であった。

国崎定洞が派遣された一九二〇年代半ばのドイツは、第一次世界大戦敗戦時の革命で君主制と決別し、世界で最も

民主的な憲法をもったワイマール共和国の時代である。同時に戦後賠償で経済・財政は苦しく、マルクが暴落したバ
ルリンは、日本人にとって格好の留学・滞在先であった。関東大震災後、文部省は大量の若手研究者を在外研究に派
遣した。その大部分はドイツを渡航先に含めていた。ワイマール民主主義のもとで、バルリンは世界の学術文化の中
心であり、日本人にとっては格好の「洋行」「外遊」の地であった。そこで国崎定洞は、言論の自由も政治活動も自
由な研究環境の中で、勉学と青春を謳歌する。

3 ベルリン社会科学研究会から反帝グループへ

国崎定洞が留学した当時のベルリンには、約五〇〇人の日本人が滞在していた。一九二六年末に、東大新入会出身
で法学部助教授の蠟山政道ろうやま まさみちの提唱で、経済学の有澤広巳、社会医学の国崎定洞、それに有澤と一緒の船で「洋行」し
た河上肇門下の京大谷口吉彦、高松高商堀江邑一ら、さらに朝日新聞特派員岡上守道（黒田礼二）、電通特派員鈴木
東民、新劇役者千田是也らも加わって、蠟山の下宿で勉強会を始めた。蠟山の実弟で京大助教授の山田勝次郎、和歌
山高商山本勝市ら河上肇門下の若き経済学者たち、東大出身で九州大学助手の菊池勇夫・舟橋諱一、福島高商の松山
貞夫らも加わって、日本語なら伏せ字だけのマルクス、エンゲルス、レーニン、プハーリン、スターリン、ヴァル
からのドイツ語文献と一緒に読む。これが、ベルリン社会科学研究会である。

後に東大国際法の横田喜三郎、経済史の土屋喬雄つちや けいお、法学の平野義太郎、京大政治学の黒田寛、経済学八木芳之助、
統計学蟻川虎三あぎが くとらも顔を出し、鈴木東民、岡上守道、与謝野譲よしかの ゆずら在独ジャーナリスト、それに演劇の千田是也を介
して映画の衣笠貞之助、岡田桑三、音楽の岡内順三ら芸術青年たちも加わる。後の三〇年代日本資本主義論争の講座
派（平野・山田ら）も労農派（有澤・土屋ら）も、両派をおしつづいた体制派（国民精神文化研究所の経済学担当・思想

善導係になる山本勝市、柔道赤化防止運動の浦和高工藤一三ら）も、ドイツという異境の地では異越同舟で、当時の最先
端理論のひとつであるマルクス主義を学んだ。

この社会科学研究会のなから、医学者である国崎定洞が、もつとも早く急進化して実践家となる。ドイツ滞在中
に、社会医学者として「社会衛生学講座」（アルス出版、一九二七年）を刊行したが、同時に、友人浅野晃を介して和
田哲二名によるレーニン「共産主義内の「左翼」小児病」の日本語訳も出版していた（希望閣、一九二六年）。訪独の
さい日本に残してきた病気がちの妻斉藤ともを亡くしたこともあり、本来二年の留学期間を経ても帰国せず、ドイツ
に残り、革命家となることを決意する。読書会のなかの左派、有澤広巳、堀江邑一、千田是也らと共に、日本とは違っ
て合法的に活動するドイツ共産党の実践活動にも近づく。

有澤・堀江らは二八年には日本に帰国して学究生活に戻るが、国崎定洞は、ドイツの女性労働者で共産党員である
フリーダ・レートリッヒと結婚し、娘タツコを得て、ベルリンの労働者街に居をかまえる。労働者演劇を学ぶ千田是
也と共に、ドイツ共産党日本人部を創設し、自らその代表者となる。国崎定洞は、帰国すれば東大医学部の初代社会
衛生学講座教授の座を約束されていた。当時の医学部首脳である長与又郎や林春雄が国際学会の途上に帰国の説得
を試みたが、国崎は応ぜず、二八年五月に東京帝大を依願免官、医学者としての職を離れた。もつとも国崎定洞は、
三二年ソ連入国時の自筆の共産党履歴書には、思想的理由で「免官を強要せらる」「大学から追放された」と記して
いる。

この社会科学研究会のなから、ドイツ共産党に入党した国崎定洞と千田是也を中核に、読書会にはあきたらない
在独日本人を集めて、一九二九年頃には、より実践的な左翼グループが生まれる。社会科学研究会の若手学者のほと
んどは帰国するが、帰国後の有澤広巳、平野義太郎、堀江邑一らは、友人や後輩をこのグループに送り込む。

一九二九―三三年期には、ドイツ共産党日本人部責任者として職業革命家になった国崎定洞の指導のもとに、京城

帝大経済学三宅鹿之助、東北大経済学服部英太郎、東京商工会議所小林義雄、成蹊高哲学三枝博音、山形高ドイツ語岡部福造、京大政治学大岩誠、早稲田大労働法野村平爾、広島高師哲学山西英一ら若手学者ばかりでなく、千田是也、岡内順三（村山知義義弟）、プロレタリア文学の勝本清一郎、藤森成吉夫妻、建築の山口文象、演劇の佐野碩、土方与志、画家の島崎翁助（島崎藤村三男）、鳥居敏文、竹谷富士雄ら文学・演劇・美術・建築・写真などの芸術家たちが組織された。そこに、多くは旧制高校で左翼運動により検挙・放校されて、親が心配してドイツに送った「良家の子弟」たち、小林陽之助、川村金一郎、根本辰、和井田一雄、喜多村浩、安達鶴太郎、嬉野満洲雄、八木誠三、小栗喬太郎、井上角太郎、大野俊一、千足高保らベルリン大学等の留学生たちも加わり、日本の中国侵略に反対し、ドイツでのヒットラー・ナチズムの台頭に抵抗する、反戦・反ファシズムのデモや集会の実践活動に入っていく。

このグループは、マルクス主義文献の読書会のほか、日本の社会運動とのネットワークづくりにならずにたずさわった。ちよどワイマール民主主義のなから、ドイツ共産党とナチスの両翼が台頭し、対立が尖鋭化していた。日本でも左翼運動が最盛期を迎え、軍部主導の中国侵略が本格化する時期であった。モスクワの共産主義インターナショナル（コミンテルン）日本共産党代表片山潜・山本懸蔵・野坂参三と、ベルリンの国崎定洞・千田是也・勝本清一郎らドイツ共産党日本人部とのつながりで、当時の左翼情報はこのグループがいち早くモスクワから入手し、さまざまなルートで日本に伝えた。

日本共産党のいわゆる「三二年テーゼ」は、ベルリンの国崎定洞から日本の河上肇に送られ「赤旗」特別号に訳出された。国崎の指導のもと、千田是也、勝本清一郎らは、ナップ（全日本無産者芸術団体協議会）ベルリン支部、プロレタリア科学研究所ベルリン支部、革命的アジア人協会などを組織し、国際反帝同盟、国際赤色救援会（モツプル）、国際労働者救援会、文学・演劇・美術・建築・写真などの左翼国際組織と連絡していた。当時のナチス台頭を伝える『改造』『中央公論』『戦旗』『働く婦人』などの日本の雑誌へのドイツ現地からの寄稿の多くに、このグループが関与

し執筆していた。

4 反戦反ナチの在独革命的アジア人協会

当時の在欧日本人知識人の反戦平和ネットワークとは、日本国内での東大新人会、京大大学連事件、三・一五日本共産党検挙、プロレタリア文化運動などの共通体験に、最新の反戦反ファシズム左翼情報の共有を、オーバークラッシュしたものであった。

国崎定洞は、ドイツ共産党の幹部ハインツ・ノイマン、ヴィリ・ミュンツェンベルグ、ヘルマン・ドゥンカーらと親しく、主に国際反帝同盟の反帝国主義・植民地解放、反戦平和の運動を担当した。一九三〇年夏に、文部省留学生の社会学者新明正道、経済学の大熊信行、杉本栄一らは、国崎定洞らとは別個に、ドイツ共産党から離れた左翼カー・コルシュ、アウグスト・タールハイマーを囲む研究会を開いていた。このグループからも、服部英太郎は反帝グループに加わる。

またパリには、ベルリン反帝グループと密接な関係をもち、大岩誠、嬉野満洲雄、野村平爾、佐野碩、和井田一雄、大野俊一ら一部のメンバーが重なる、ガスプ（在巴里芸術科学友の会）という組織があった。パリ・ガスプ・グループの中心は、ファシズムの芸術抑圧に反対し、自由と平和に敏感な内田巖、佐藤敬、吉井淳二、田中忠雄ら若手画家たちで、後にドイツに移る野村・嬉野・大岩・和井田・大野らのほか、美術研究の富永惣一、建築の坂倉準三、化学の平田文夫らが加わっていた。歴史家ねず・まさしが、岡田桑三の勧めでモスクワに向かう途中、三三年五月にパリで会ってフランス的反戦感覚を学び、日本に戻って新村猛・真下信一・中井正一らの『世界文化』の活動に加わる契機をつくったのは、このパリ・ガスプ・グループとの出会いであった。つまり国崎定洞のドイツでの反戦平和運動の

周辺には、後に日本の学術・文化・芸術活動を牽引する著名な人々が、多数含まれていた（加藤哲郎「ワイマール期ペルリンの日本人」岩波書店、二〇〇八年、参照）。

国崎定洞らの活動は「ペルリン在住日本人左翼グループ」「ドイツ共産党日本人部（エル・ゲー）」「在独日本人革命家グループ」などさまざまな名前で、特高外事警察の記録や関係者の回想にでてくるが、当時のドイツには、日本人ばかりでなく、日本国籍の朝鮮人を含むアジアからの来訪者も多数滞在していた。ドイツのプロイセン内務省が、国崎定洞らに独日本人左翼に注目し警戒したのは、ドイツ人の反政府運動と日本人・アジア人の異国での社会運動が結びつくことだった。

国崎定洞らは、一九三一年九月に本格化する日本の満洲侵略をきっかけに、ドイツ人、日本人ばかりではなく、ドイツに滞在するアジア人をも組織し、ドイツ語圏でアジアの戦争の危機を訴えた。一九三二年春結成の「革命的アジア人協会」である。国崎定洞・小林陽之助らの他、野村平爾、大岩誠、喜多村浩、和井田一雄、三枝博音、小栗喬太郎、八木誠三、小林義雄、安達鶴太郎、嬉野満洲雄らが、この反帝活動に関わった。アジア情勢に理解のあるドイツ人ヴァルター・フリードリヒ（Walter Friedrich）、フリーダ・レトリヒ（Frieda Redlich、国崎定洞夫人）、中国人留学生廖承志（リョウショウシ）、章文晋・王炳南・成仿吾、朝鮮人留学生李康国（イカンクク）、インド独立運動の在外活動家ヴィレンドラナート・チャットパディア（Virendranath Chattopadhyaya、アグネス・スメドレー前夫、国際反帝同盟書記）ら加わり、数十名で集会・デモを組織し、満洲戦争に反対するドイツ語の雑誌「革命的アジア」を刊行した。

『革命的アジア』誌の現物は、今日、ドイツ連邦公文書館と日本の筆者のもとに、一九三二年三月・四月・五月号、一九三三年一月・三月号が残されている。ちょうどドイツにおけるナチズムの台頭、三三年一月ヒットラーの政権掌握と重なる時期である。ドイツ政治への介入は注意深く避けて、日本の中国侵略反対とアジアの非抑圧民族の独立を訴える内容であった。当時のドイツで発行されたドイツ語雑誌の中では、きわめてユニークなものであった。以下

に、目次のみを訳出して掲げよう。その国際的広がり主張が理解できるだろう（活動の詳細は前掲拙著「ワイマール期ペルリンの日本人」参照）。

『革命的アジア』第一号（一九三二年三月）

革命的アジア人協会の宣言／上海（コー・リン）／日本の満洲侵略に対する人民闘争（中国人通信員より）／ある日本の学生からの手紙（カガミ）／インドの大衆は前進する（モハン）／詩　ペーピンからの嵐の中で（モリジマ）

『革命的アジア』第二号（一九三二年四月）

ヨーロッパの勤労者へ／片山潜からの手紙／反帝国主義・反戦会議／中国ソヴェトの闘争（中国の労働者通信から）／国民党についての人民裁判（上海の示威集会とデモについての手紙）／ソヴェトの旗のもとに前進せよ（ヴァン・タンニヤ）／トリガンジーの婦人労働者のストライキ（ペリ・ピリ、インド）

『革命的アジア』第三号（一九三二年五月）

アジアにおけるメーデー／極東における戦争は君たちにとって何を意味するか（コー・リン、パリ）／ヨーロッパとアメリカの反戦闘士へのあいさつ／日本の兵士たちの自国帝国主義者に対する英雄的闘争（ヤマダ）／インドネシアの緊迫した情勢（フーザン）／ユ・ア・マウ、上海をめぐる闘争の一断面（ある上海の新聞から翻訳）／短信（我々の活動についての小報告、ヨーロッパにおける反帝アジア人への弾圧、インドの赤シャツの上に爆弾が、第十九広東軍、我々の読者へ）／インギラブ・シンダバド（革命万歳！　タゴール）

国崎定洞は、この『革命的アジア』第三号を刊行するところまででドイツを去り、ソ連に亡命する。このことを証明する国崎定洞自筆の資料が、二〇一二年春に新たに発見された。それは、モスクワの旧ソ連共産党公文書館の片山潜のボックスに入っていたが、手紙自体、長い旅を経ている。アメリカ人の歴史家ジョセフィン・フォーラーは、一九二〇・三〇年代アメリカ西海岸のアジア人労働運動を研究し、モスクワで大量の第一次史料を収集して博士論文

を英語の書物にしたが、出版直後の二〇〇七年に没した。没後、彼女が英語の書物 Josephine Fowler, "Japanese and Chinese Immigrant Activists: Organizing in American & International Communist Movements 1919-1937" (Rutgers University Press, 2007) 執筆のためにモスクワで収集した資料が、カルフォルニア大学ロスアンゼルス校ヤング研究図書館のコレクションに寄贈された。その中に、大量の片山潜関係資料があり、ベルリンの国崎定洞がモスクワの片山潜に宛てた手紙も含まれていた。ちょうど反戦反ナチの在独アジア人運動を指導していた時期、一九三二年四月一日付けの日本語の手紙である。

拜啓 この間の御手紙有り難ふ御座いました。

御送りの物も受け取りました。シヨールもやとと修繕して受け取りました。

この間の御手紙に対し、モツブル〔国際赤色救援会〕とのその後の交渉、産労〔産業労働調査所〕の中の意見につき、及びごちらの状況、大統領選挙の結果等にくわしい手紙を書きかけているのですが、急な仕事が出来て、中断していたところですが、余り御返事がおかれると御心配をかけるわけですから、今度は簡単に以上の趣きのみ、取り急ぎ認めます。四五日中に詳しい様子かき送るつもりです。こちらの亜細亜革命協会〔革命的アジア人協会〕への御手紙、都合で非常に遅れて、初めて第二号で出すことが出来ました。丁度戦争のことに關して書いてありますので、丁度いい都合だと思います。

これは、何とか独立でやって行きたいつもりで、皆で一生懸命売っています。今までのところ、反帝〔国際反帝同盟〕等から少し補助を貰っていますが、三千位売れば、やって行けるのですが、われわれの奮闘次第では三千位は売れるかと思えます。僕の所の子どもをつれて会になど行くとよく買ってくれるので、子どもなかなか得意です。多少ならば意義あると信じますし、どうしても続けたいのです。小生の合法的滞留は、いろいろの点から考えて、どうも時間の問題で、結局は近くだめになるうと思えます。

早くそちらでうんと鍛えて貰いたいものです。フラウ「妻」と子供もその時はつれてきたいと思えますが、可能性あるでしょうか？ その折はいろいろお世話を願わねばなりません。皆さんによろしく。近くくわしいたよりをさしあげます。急ぎで。

T. K. (14 April 1932)

この手紙では、片山潜自身の手紙を掲載した『革命的アジア』第二号（一九三二年四月）が三〇〇〇部の発行部数であり、何とか売って今後も継続していきたいという。他方で、自分のドイツでの合法的活動は難しくなっており、モスクワに家族と共に亡命したいという、モスクワ在住コミンテルン執行委員片山潜への連絡の手紙である。

この頃モスクワの片山潜は、国崎定洞にソ連亡命を勧めていた。「人間 国崎定洞」に収録した年譜で言えば、一九三二年一月「在独革命的アジア人協会を結成、組織部長となる、三月、ベルリン警視庁よりプロイセンからの退去命令を受ける」の直後で、「三二年テーゼ」を五月に日本の河上肇に送付し、八月末の阿姆斯特ダム国際反戦大会に片山潜らと共に日本代表として出席し、そのまま九月四日にモスクワに移住する準備の手紙である。ナチスの台頭するドイツを追放されて、日本に帰国するのではなく、当時世界革命の根拠地で「労働者の祖国」とよばれたソ連邦への亡命を承諾・決意したもので、妻フリーダと娘タツコも一緒だった。

ただし革命的アジア人協会が、国崎定洞亡命後も、一九三三年一月のヒットラー政権樹立後まで秘かに活動を続け たことは、中核メンバーの一人であった八木誠三（当時ベルリン大学学生、帰国後名古屋で実業家）が日本に持ち帰った資料から分かる。A5版雑誌の形式から、タブロイド版新聞活字に変わっている。

『革命的アジア人連盟・通報』第二号第一号（一九三三年一月）

世界戦争が君たちをおびやかしている（ベルリン、一九三三年一月二日付、在ドイツ革命的アジア人協会）／中国の將軍たちの権力をめぐる闘争／朝鮮人は何を食べているか／東京における市電労働者の闘争／日本からのニュース

(汎太平洋反帝会議を一九三三年三月東京で、さし迫る戦争インフレ、児童の野蛮な擄取) / 中国からのニュース
「革命的アジア人連盟・通報」第二年第三号(一九三三年三月)

朝鮮の三月蜂起の一四周年によせて / 帝国主義的殺りくと民族革命的な人民抵抗の中心としての満洲 / 在ヨーロッパ中国人・日本人共産主義者グループのよびかけ / 朝鮮からのニュース / 日本における工業の状態 / 日本からのニュース / アジア諸民族の同盟? (在ドイツ、日本人連盟通報、一月三十一日) / 満洲支配会社としての南満洲鉄道(同前、二月一日) / 中国からのニュース(満洲の義勇兵に対する日本の市民組織、義勇兵は満洲において活動場所を広げている)

この異国での活動の中で作られた学問・芸術・文化の多領域を横断する若いアジア人のネットワークは、青春時代の濃密な共通体験の記憶として、長く受け継がれる。例えばベルリンでのアジア人連帯の直接の延長上で、反帝グループで活動した朝鮮人李康国は、帰国して京城帝大助手になり、ベルリンで一緒に活動した経済学助教授三宅鹿之助と共に、一九三四年五月に抗日活動の容疑で検挙された(京城帝大赤化事件、李康国は戦後北朝鮮で政府高官になる)。当時のヨーロッパには、一九二〇年代初頭に周恩来がバリ留学中に創設した在欧中国人の強力な反帝・反戦組織があった。「革命的アジア人協会」は、それと結びついてきた。戦後の日中文化交流に大きな役割を果たした演出家千田是也は、日中国交回復以前に幾度か中国を訪問し、王炳南(中国人民対外友好協会会長)、廖承志(中日友好協会会長)、章文晋(カナダ大使)、成仿吾(東北人民教育大学学長)らの消息を求めた。廖承志らと、かつての革命的アジア人協会でのつながりから国崎定洞のことを語り合うことができ、彼らが共産中国で建国と日中友好に尽力してきたことを知る(千田是也の加藤哲郎宛手紙、一九七六年一月三日)。

このような意味で、日本人国崎定洞のドイツでの活動は、社会医学を捨てて反帝反戦活動に特化したものであったが、同時に、アジア人の連帯と植民地解放に連なるものであった。アジアの知識人として、自国の侵略戦争に反対し、民衆の解放を求めたものであった。

5 戦前日本の越境国際主義者の悲劇

ところが、ソ連崩壊後の一九九〇年代に見出されたものは、ドイツでの国崎定洞の狭い意味での共産主義を超えた反帝国主義・反ファシズムの活動が、亡命先のソ連では「ブルジョア的」と疑われ、かつての社会科学研究会・反帝グループの仲間の何人かが日本に帰国後「転向」して「裏切り者」になったとして、国崎定洞自身が「日本帝国主義のスパイ」として監視され、粛清される悲劇だった。

確かに満洲事変以後の日ソ関係の緊張と、ナチス政権掌握後の日独防共同盟の強化のなかで、ソ連における日本人の位置は不安定だった。たとえ共産主義者であっても、モスクワの雑誌では、「外国に居住する日本人はみなスパイであり、また外国に居住するドイツ人はみなゲシュタポの手先である」と公然と語られていた。そうした粛清の疑心暗鬼の中で、国崎定洞は、日本共産党指導者である山本懸蔵に告発され、ソ連秘密警察に検挙されて、一九三七年末に銃殺された。当時モスクワに在住していたドイツ共産党やポーランド共産党の反ナチ亡命者たちの多くも、国崎定洞と似た運命をたどった。

ソ連に在住した日本人では、早稲田大学卒業後アメリカに仕事を求めて入国し、西海岸のアジア系移民労働運動を指導して国外追放になり、日本帰国よりも「労働者の祖国」ソ連亡命を選んだアメリカ共産党日本人指導者健物貞一(ら十数人「アメレ組」とよばれる)も、スターリン粛清の犠牲者となった。先の国崎の片山宛手紙を見つけたジョセフィン・フォラーは、アメリカ西海岸で国籍を越えて中国人・朝鮮人・フィリピン人の連帯した労働運動を組織した日本人・日系人の活動と、そのソ連亡命後の悲劇を、アメリカ人の眼から描き出した。国崎定洞がワイマール民主

主義を体験して社会主義ソ連にあこがれたように、アメリカでのアジア人差別が、日本人労働者・知識人を「労働者が主人公の国」ソ連に向かわせた。

彼らは、いったん留学や移民のかたちで日本からドイツやアメリカに越境し、そこで異国に存在する自由と民主主義を体験したがゆえに、現地の警察権力とは衝突し、より自由な生き方を求めたのであった。アジアで侵略戦争を始めた日本への帰国は、選択肢になかった。「労働者の祖国」ソ連に亡命し、その現実に裏切られた。旧ソ連在住日本人約一〇〇人のうち、なんらかの粛清から逃れることができたのは、コミンテルン執行委員野坂参三のみであった。その野坂の妻籠も、一時は牢獄につながれた。スターリン粛清による悲劇は、強制収容所（ラーゲリ）での集団労働による思想矯正という名目で、第二次世界大戦後の日本人捕虜シベリア抑留に、そのまま受け継がれた。

国崎定洞を含むソ連に亡命した知識人の悲劇は、知識人として異国で日本の侵略戦争やファシズム・抑圧に抵抗したことなく、知識人の持つ本質的に批判的な思考を、権力に対する懐疑と抵抗を、社会主義・共産主義のイデオロギー、マルクス・レーニン主義理論、社会主義と称する国家の抑圧性に対してまでは及ぼし貫くことができなかつたことであつた。

〈編集委員紹介〉

趙景達 (チョ キョンドル)
1954 年生まれ、千葉大学文学部教授、専攻：朝鮮近代史

原田敬一 (はらだ けいいち)
1948 年生まれ、佛教大学歴史学部教授、専攻：日本近代史

村田雄二郎 (むらた ゆうじろう)
1957 年生まれ、東京大学大学院総合文化研究科教授、専攻：中国近代思想史

安田常雄 (やすだ つねお)
1946 年生まれ、神奈川大学法学部特任教授、専攻：日本近現代史

講座 東アジアの知識人 第4巻

戦争と向き合って

満洲事変～日本敗戦

2014年3月10日 第1刷発行

編者 趙景達・原田敬一・村田雄二郎・安田常雄

発行者 永滝 稔

発行所 有限会社 有志舎

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3丁目10番、宝栄ビル 403

電話 03(3511)6085 FAX 03(3511)8484

<http://www.l8.ocn.ne.jp/~yushisha>

振替口座 00110-2-666491

DTP 言海書房

装幀 古川文夫

印刷 株式会社 三秀舎

製本 株式会社 三秀舎

© 趙景達・原田敬一・村田雄二郎・安田常雄 2014. Printed in Japan

ISBN978-4-903426-81-5

〈執筆・翻訳者紹介〉

岩崎正弥 (いわさき まさや)
1961 年生まれ、愛知大学地域政策学部教授、専攻：地域づくり学

萩原 稔 (はぎはら みのる)
1974 年生まれ、大東文化大学法学部講師、専攻：近代日本政治思想史

松本武祝 (まつもと たけのり)
1960 年生まれ、東京大学大学院農学生命科学研究科教授、専攻：朝鮮近代農業史

山本 真 (やまもと しん)
1969 年生まれ、筑波大学人文社会系准教授、専攻：中国近現代史、農村社会史

緒形 康 (おがた やすし)
1959 年生まれ、神戸大学大学院人文学研究科教授、専攻：中国近代思想史

洪宗郁 (ホン ジョンウク)
1970 年生まれ、同志社大学グローバル地域文化学部准教授、専攻：朝鮮近現代史

根津朝彦 (ねづ ともひこ)
1977 年生まれ、国立歴史民俗博物館機関研究員、専攻：戦後日本のジャーナリズム史・思想史

後藤嘉宏 (ごとう よしひろ)
1960 年生まれ、筑波大学図書館情報メディア系教授、専攻：メディア社会学、コミュニケーション思想史

古田元夫 (ふるた もとお)
1949 年生まれ、東京大学大学院総合文化研究科教授、専攻：ベトナム現代史

加納実紀代 (かのう みきよ)
1940 年生まれ、専攻：日本近代女性史・ジェンダー論

川瀬貴也 (かわせ たかや)
1971 年生まれ、京都府立大学文学部准教授、専攻：日韓近代宗教史

劉 傑 (りゅう けつ)
1962 年生まれ、早稲田大学社会科学総合学術院教授、専攻：近代日本政治外交史

許 雪 姫 (きょ せつき)
中央研究院台湾史研究所研究員、専攻：台湾史

若林正文 (わかばやし まさひろ)
1949 年生まれ、早稲田大学政治経済学術院教授、専攻：台湾近現代史

太田亮吾 (おた りょうご)
1977 年生まれ、専攻：日本現代史

ティノ・シェルツ
1976 年生まれ、マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルグ日独共同大学院助教、専攻：日本近現代史

山室信一 (やまむろ しんいち)
1951 年生まれ、京都大学人文科学研究所教授、専攻：法政思想連鎖史

松田利彦 (まつだ としひこ)
1964 年生まれ、国際日本文化研究センター教授、専攻：近代日朝関係史

水野直樹 (みずの なおき)
1950 年生まれ、京都大学人文科学研究所教授、専攻：朝鮮近代史

趙景達→編集委員紹介参照

樋口雄一 (ひぐち ゆういち)
1940 年生まれ、高麗博物館館長、専攻：朝鮮近代史・在日朝鮮人史

加藤哲郎 (かとう てつろう)
1947 年生まれ、早稲田大学客員教授・一橋大学名誉教授、専攻：政治学